

はじめに2

一 先学の研究―基層語説と方言周圏論と

現代諸方言間に認められる顕著な違い10 / 「子音優位の東部方言と母音優位の西部方言」
14 / 基層語説19 / 方言周圏論―伝播と内的変化23

二 八行動詞の促音便とウ音便

室町時代京都における音便28 / 室町時代・江戸時代初期東国資料における音便32 / 江戸時代後期東国における音便37 / 平安・院政・鎌倉時代の京都における音便38 / 平安・院政・鎌倉時代の東国における音便42 / 二つの音便形の生起43 / 促音便からウ音便へ48 / 才段長音の開合の混同49 / 山陰方言と沖繩方言52 / 八行動詞のラ行化53 / J. ロドリゲス『日本大文典』の記述54 / 「買って」と「借りて」56

三 東部方言における促音の多用

現代東部方言における促音多用62 / 東部方言における促音多用の由来65

四 形容詞連用形の音便

室町時代以前の音便70 / 東部方言のウ音便72 / 東西対立の成立73 / J. ロドリゲスの記述と『醒睡笑』の笑話75

五 断定の助動詞「ダ」と「ジャ」「ヤ」

希瑣周顛講『論語講義筆記』の「ダ」「ヂヤ」78 / 「ダ」・「ヂヤ」二形の成立82 / エ段音の口蓋化87 / 「ダ」・「ヂヤ」東西対立の成立90

六 打消の助動詞「ナイ」と「ン」

東歌・防人歌の「ナフ」96 / 「ナフ」の語源97 / 大和に「ナフ」が生まれなかったわけ103 / 「ナフ」から「ナイ」へ106

七 命令形「起きろ」と「起きよ」「起きい」

東歌・防人歌の命令形112 / 「レ」形の成立115 / 東部方言におけるカ変動詞「来る」の命令形119 / 東歌・防人歌に見える連体形「ろ」122 / 東歌・防人歌以外にも見られる連体形「ろ」125 / 連体形「ろ」の起源127 / 「ヨ」形から「ろ」形を生じた方言と生じなかった方言132 / 東部方言における命令形「ろ」134

八 東京式アクセントと京都市アクセント

京都アクセントと東京アクセントとの分岐136 / 分岐の時期137 / 方言間における特殊音素の
独立度の違い140 / 音便によって生じた特殊音素144 / 上代における特殊音素146 / 特殊音素の
独立150 / 音便の定着とアクセント体系の分岐152 / 全国主要都市のアクセント体系159 / 全国
主要都市の名詞のアクセント163 / 二音節第五類名詞のアクセント169 / 名詞への影響の実際
173 / 三音節第七類名詞のアクセント174 / 四音節名詞のアクセント178 / 二音節名詞のその他
の類のアクセント179 / 特殊音素の独立度の違いの生起182

九 母音連続の融合と非融合

融合する方言と融合しない方言186 / V + i 187 / V + u 195 / 〈名詞 + 格助詞「へ」〉・〈名詞
+ 格助詞「を」〉の融合と非融合197 / a + e 199

おわりにに 201

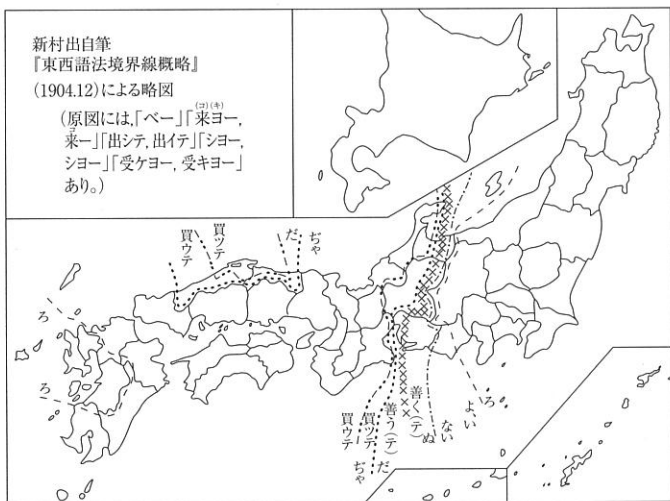
あとがき 203

現代諸方言間に認められる顕著な違い

方言のもつ魅力の一つはその方言に特有の語の面白さにある。四国松山の方言では「触る」ことを「まがる」と言い、「大事な絵^エじゃけん、まがられんよ。」（大事な絵だから、触ってはいけないよ。）と言う。また、人の性格を言う語に「よもだ」という語があつて、共通語で「好い加減な」「不真面目な」「とぼけた」「はつきりしない」「優柔不断の」と言い換えてみても、どのことばでも言い表せない独特の意味を表す（松山出身の伊丹万作らも注目）。方言を話題にするテレビ番組などもそういう視点で方言が取り上げられることが多い。これは、そのような例が人々の興味を引きやすいし、分かりやすいからでもあるが、思えば、日本語を使う一人一人の人が必要に迫られて不断に新しい語を作り出してこそ、はじめてその言語は活力を維持することができるのであるから、決してこれを軽視してはならないと思われる。

しかし、日本語諸方言間に認められる違いが、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかを論じようとする時には、膨大な数にのぼり、時代とともに減じていたり、生まれてきたりする単語のなからいくつかの語を任意に取り上げるというのではこの本質を見失う。その目的のためには日本語の根幹にかかわる言語事象を対象とする必要がある。また、その方言分布が大きな意味をもつ

『東西語法境界線概略』（新村出氏）



ような分布をしている言語事象に注目する必要がある。「まがる」（触る）「よもだ」などといった一つ一つの単語よりは、断定の表現にどのような形式を用いるかとか、アクセント体系はどのようなものであるかといった事象の方が日本語のより根幹の部分を作っていると云つてよいであろう。

そのような、根幹の部分を作すと見られる言語事象を対象として日本語諸方言間の違いを明らかにした早い時期の成果として文部省国語調査委員会の仕事がある。我が国が近代国家として諸外国に互していくに当たって、どのような言語を日本語の標準と認めるかを定めるために、全国各府県に通信による言語調査を行った結果をまとめたもので、『音韻調査報告書』（一九〇五・三、付『音韻分布図』二九枚）と『口語法調査報告書』（一九〇六・一二、付『口語法分布図』三七枚）とがある。